

いつも一緒に 富士のペットたち

近年、小型犬と一緒に暮らしている人の割合はますます増加しています。この欄の読者の中にも、トイプードル、チワワ、ヨークシャーテリアなどの小型犬や、そのミックス犬たちを飼っている人は多いのではないのでしょうか。



山田 武文

やまむろ動物病院院長
(富士市中川原)

徐々に進行

脱臼ひとつと、ものすごく痛いもの、動かすことができないもの、イメージしがちです。膝蓋骨内方脱臼は徐々に進行する上に、膝が外れた状態でも何とか足を曲げ伸ばすことができますので、通常はそこまで激しい症状は見られません。

では膝が外れたままでもいいのかというと、もちろんそこではありません。痛みや歩行異常が出るだけでなく、膝の靭帯を損傷・切断してしまう可能性が

膝蓋骨内方脱臼



手術後は何度か通院し、足をチェックする

靭帯損傷の危険も

高くなります。成犬になってから事故などで突然発症することもありますが、多くは成長期の過程で発症し、少しずつ進行していきます。その結果、足に発育異常が発生し、骨が曲がって固まってしまうこともありま

4段階に分類
膝蓋骨内方脱臼は、グレードI〜IVの4段階に分類されます。グレードIは膝が時々外れただけなので特別な治療は行い

ません。膝に不安を抱えていることを認識し、激しい運動を控え、強い衝撃を与えないように気を付ける必要があります。グレードIIは日常的に外れたり戻ったりしている状態です。基本的にはこの段階から手術での治療が推奨されます。膝の骨と周囲の組織が不自然に擦れ合っ



成長過程であれば減量や生活環境の改善、サプリメントの投与などでグレードIに戻すか、グ

レドIIの状態を維持できる可能性もありますが、実際は進行してしまふことが多いようです。手術は、膝蓋骨が乗っている骨の溝を削って深くするとともに、膝蓋骨を外側から引っ張っている靭帯を短く縫い合わせ、膝が内側に外れるのを食い止めます。手術とその後適切な管理を行うことで、正常で快適な歩行を取り戻すことができます。

グレードIIIでは、膝が外れた状態が当たり前になっていま

るか、飼い主に判断してもらっています。残念ながら膝蓋骨内方脱臼の発生を完全に防ぐ方法はありません。足に大きな負担を掛けるような過度で不適切な運動をさせたり、肥満犬にしてしまったりということは、状態をさらに悪化させるので、十分気を付けてください。

手術後は何度か通院し、足をチェックする

「いつも一緒に 富士のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。

